

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲 第 1137 号	氏 名	松 葉 友 幸
論文審査担当者	主 査 中山 淳 副 査 伊藤 研一 ・ 塩沢 丹里		
<p>(論文審査の結果の要旨)</p> <p>腱板修復術後に変形性肩関節症(OA)をしばしば経験するが、長期経過例における報告はない。OAに関連する因子として全身因子と局所因子が挙げられる。広範囲腱板断裂では長期経過においてOAが起り、痛みが生じることになる腱板断裂症性関節症という病態があり、腱板断裂がOAの局所因子になりうる。また腱板断裂が修復されるとOAにどのように影響するか、腱板修復後の再断裂の有無がOAに影響するかを検証した報告はない。</p> <p>今回我々は、mini-open repair 法にて腱板修復術後に10年以上(平均11.1年)を経過した86例を調査した。術前と最終診察時に患側と健側の単純X線を肩内旋位、外旋位、挙上位にて撮影した。Samilson&Priestの分類を用いてOAの程度を評価して両側間と術前後で比較した。最終診察時までにはOAが進行あり群と進行なし群に分けて2群間で患者背景、肩関節機能を比較した。さらに最終診察時のMRIで修復腱板の連続性が良好な群と不良な群にわけて2群間でOAの程度を比較した。</p> <p>その結果、松葉は次の結論を得た。</p> <ol style="list-style-type: none">1. 肩関節のOAは腱板修復術を施行した患側と健側の両側において進行したが、腱板修復側の方がより進行した。2. 術前の肩関節機能低下がOAの危険因子だった。3. OAが進行しても術後の肩関節機能は変わらなかった。4. 腱板修復術後の修復腱板の状態が良好であれば不良な症例よりOAの進行が少なかった。 <p>今回の結果から、腱板修復術後の良否によってOAの進行は影響を受けるので、OAの進行を抑えるためには腱板修復によって腱板の連続性を維持することが重要であると思われた。</p> <p>主査、副査は一致して本論文を学位論文として価値があるものと認めた。</p>			